

昭和二十五年二月十五日發行（毎月一回十五日發行）（通第十一號）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

慈

光

第二卷・第二號

目

佛陀論……………山下成一（1）

歎異鈔讚仰……………故・波岡茂輝（4）

仰ぎましようよ慈光……………松村繁雄（6）

聖人の常の仰……………花田正夫（11）

次

の程知らぬ邪見橋慢の惡業生をいよく呆れ給わず、捨て給わず、その橋慢をカライソウと見そなわし涙を以て飽迄御同情下さる佛陀の大悲を却つて感戴せしめられるのであります。此に到らしめる御辛勞までが實に佛力の賜であります。

然し蓮師も信に入るには第一に宿善、第二に善知識と宣べられてあります、その善知識に遇わせて頂く事までが宿善の一つであり又直に佛力の廻向からであり「偶々行信を得ば遠く宿縁を慶べ」と祖聖が偶々の一字を高く掲げて居られますように善知識に遇う事は偶々であります。祖聖が御修行中同一京都にあつて法然上人の御近況をよく御知り遊ばされたに拘らず廿九歳の御年までその善知識に遇い難かつた事を省みられて「眞の知識に遇ふことは難きがなかになほ難し」と咏歎して居られます。私は宿縁有り難くして往年一代の名師近角先生に遇わせて頂きし幸慶を今更ながら感銘措く能わぬのであります。恩師ましますと唯々御徳を渴仰し奉る外ありません、要之、佛を信ずるとは祖聖が「よき人の仰せをかぶりて」と歎異抄に述べ給い、又正信偈に、「唯高僧の説を信ずべし」と結ばれてあります様に、善知識の御言葉通りそのまま信順する外ないのでしよう。つまりその御言葉を通じて流れ出する佛陀の眞実心と大悲心とを感戴する外佛陀に接する道はないと思ひます。盲信ではありません、その慈悲と眞實とに動かされて信順せねばならぬようになるのであります。

・佛法僧の三寶そのまま一つであつて法あつてこそ佛あり、かくてこれを正受する僧あり、又佛いままさずば法も顯れず又僧もなく、又僧なくば法も傳らず佛も群生に大悲を施すに由なしであります。う。かく思ひを馳せれば善知識の御言葉を唯信順し得るようになる

歎 異 鈔 讚 仰

私が始めて「歎異鈔」という本が、此の世の中にあることを知つたのは今から三十三年以前、私の歳の二十五の時でした。その當時私は中學の四、五年及卒業後一ヶ年を費して得た野狐禪の惡夢から醒めて、頻りに罪惡を感じ心が動搖して止まなかつたので、何とかして安靜な清淨な心になりたいと思つていたのでした。明治三十五年に東大に入學し、その年の第二學期から、近角常觀師の求道學舎に入れて頂く事になりました。學舎にお世話になるようになった動機は、先生の日曜毎の講話を拜聴しようと言ふよりはむしろ、自炊生活が貧乏な私に都合がよかつた爲と云うのが本當で、甚だ先生に對しては相濟まないといふに慚愧に堪えませぬ。

學舎には佛間があり、毎朝勤行がありました。先生が讀經なさる舎生十數名がその背後に端座して禮拜するのであつた。そして勤行がすむと舎生が一人一章づつ「歎異鈔」を輪讀するのです。これが私が「歎異鈔」を知つた始めて、當時は讀むには讀んだが、何のことが一向判りませんでした。強いて判らうともしなかつた。時節未だ到來しない爲か、勿體ない事には、怠け者の私は朝寝坊をして勤行に參列しない事も一再でなかつた。とに角こらうして私は「抄」を讀み始めました。

「お世話になつたのは三年間で、私は大學を出て、早稲」になり、本郷から通うのでは電車のない頃なので、

まで法縁に浴する事を先途とし、かくて始めて佛陀の實在が疑えなくなり、同時に佛陀の御救いを實感し自由無碍の妙消息を滿喫せしめられる事になるのでしよう、否救われるから佛陀ありと同時に實感する事になるのであり、斷じて我が愚痴や計らいから造り上げし佛陀ではありません、砂糖を嘗めて始めてその甘い味に舌鼓を打つと同時に砂糖ありとハッキリわかる様であります。茲に某氏の質問に答ふるつもりで佛陀論を稿しました。

法然聖人の御歌

さへられぬ光もあるをしなべて
へたてかほなるあさかすみかな
あみだ佛といふより外は津の國の
なにはのこともあしかりぬべし
阿彌陀佛と心は西にうつせみの
もぬけはてたる聲そすゞしき
月影のいたらぬ里はなけれど
ながむる人のこゝろにそすむ
阿彌陀佛と十聲唱へてまどろまん
ながきねふりになりもこそすれ
池の水人のこゝろに似たりけり
にぎりすむことさためなければ

故・波 岡 茂 輝

往復に中々容易でないで、牛込に引越したまでであつた。私はこの三年間も、我儘勝手な振舞をなし、破戒無慚な仕打を續けていながら、未だ嚴肅な反省をするに至らず、徒らに心猿意馬の狂りに任せ、罪惡を重ねていました。日曜毎の先生の講話に幾度も「地獄は一定」誓願不思議「凡夫直入」の旨を聽聞したに相違ありませぬ。然し心眼全く盲した私には、所謂馬に念佛で、一念の稱名も敢てしなかつたのです。どうした都合でしたか、恰も飛ぶ鳥の障子に影さすように、ちらと彌陀の誓願不思議が頭の中を掠め去つたように感じ何となく涙のこぼれた事もありましたが、凡愚に徹せず、自分を如實に知ることが出来なかつたので、永く大慈大悲を仰ぐこともなく忽ち退轉し、相變らず無信迷妄の凡夫人でした。

退舍後は、學舎の日曜講話を拜聴することも少なく、毎朝拜聴した「歎異鈔」に手をふれることも稀になつた。そして何の束縛もなくなつた私はますます本能の催すままに放縱の生活を續けていた。卒業後八年目に、私は東京を去つて京城の學校に轉職することになつた。東京に居れば居れたのを強いて渡鮮を決行した動機は、人に勧められた爲でもあつたが、殖民地なら何の躊躇逡巡することもなく、誰にも遠慮することもいらす、心に咎められることもなく、自由放埒な思う存分の生活が送られるだらうと思つたからであつた。私はこんなすさんだ生活をしていながら、猶心の何處かに、自ら

告めるものある事を感じ、思うように自由が求められない事が感ぜられ過去の生活を清算したいと思ひ道を求め、理想を追求し、光明を懐ける傾を失つていなくなつたのであります。それで機会あることに、道友と道を語り、禪堂に提唱を講ぎ、思想に關する書を繕き、瞑想にも耽りました。之れは中學卒業前後に禪の工夫をしてから、二度目の禪的工夫でありました。當時私はもう不惑に近い年輩になつていました。それなのに、どうも大死一番するという迄には至らなかつた。手をさし出せばすぐ届く位の處に、酒々落々、明鏡止水の境地があるように思ひながら、執着を捨てかね、峻崖から手を撒すという放れ業が出来なかつた。

私は大正八年、職を釜山の女學校に轉じました。此處に在職中に二人の女教師が寄宿舎で自殺しました。此の事件は生徒に非常な衝撃を與え柔かな心を可成り動搖させました。私は何とかこれを安定させ平靜ならしめたいと思ひ他の同僚二三と相談して、上級卒業生有志に、日曜の午前、自宅で「歎異鈔」の講話を始めました。勿論當時私は信仰を持っていませんでした。然し年も年だから、精神にも大分落つきが出て來、宗教的思想もいくらか深まつて來ていました。なお何故に講本として「歎異鈔」を選んだかと言うに、同僚の一人は「論語」を講ずることになり、「歎異鈔」なら求道學舎の時にも経験があり、且つ禪書では難解でもあり、自分にも文句さえ判らん點があつたから、それにしたのでした。何たる幸慶か。私は生徒達の心を安定させる爲に講話しながら、私自身救われたのです。自身の罪惡深重、煩惱熾盛な事、どんなに理想の實現を期しても貧弱な自力では不可能なこと、何ほろ情ない口惜しいと憤慨しても凡夫にしか過ぎない事が實感せられ、此のま

まの救いなのだという事が忽然として判つたのであります。やつと心の眼が醒め、信仰をつかみ、自らほがらかな法悦の天地が開け再生の思ひをしたのであつた。この時私の歳はもう四十二になつていました。こうした境地を求め始めてから二十三年になります。實に長い間無明の暗に呻吟していたものであります。その後内地に歸つてからも、私の信仰には未だ宿命論的なもの、自然主義的なものがあつたのに驚きましたが既に根底が築かれてあつたので、幸に轉覆することもなく奮然不思議が仰がれ、四十四にして慈々專修念佛の行者となることが出来たのでした。それから後の「歎異鈔」の有難さ、勿體なさ、この法悦を人にも分ちたいと思ひ、既に一千部も頒けたでしよう。「歎異鈔」に就いて述べさせて頂いたのは何千何百回か數えられません。こうして「歎異鈔」は私の信仰思想の全部である許りでなく、生活の全部にもなつてしまひました。然るに「歎異鈔」は私の愚かさ故、まだ／＼読み足りない處があり、味い方の浅い處があり、繰り返し拜讀している間に、新に発見するものがあつて踊躍歡喜することが屢々あります。私は死ぬまで、この尊い聖教を繰り返し繰り返し拜讀しようと思つています。

仰ぎましましよりよ慈光(三)

松村繁雄

一三、悲惨なるこの現實

私は前号に於て、「佛様のお慈悲は、私に永遠の圓滿と本統の幸福を與えるために、先づ私に、私の本統の姿——無明である事罪の塊りである事無力である事を知らして下さる」と云う事を語りましたが、この事は、まだ佛縁に觸れ給わぬ方々にとつては、「罪の塊り」と知れてそれがどうして幸福か？」と云う疑問が起ると思ひますところが、自分の本統の姿を分らして貰つてそこに開ける幸福の世界と云うものは、明ると申そうか、廣いと申そうか、清らかと申そうか、何一つ不足のない、何一つわだかまりのない、充ち足つた有り難い世界であつて、そこは、「罪の塊り」と云う事を本統に分らして貰うものだけが體驗させられる世界であり、理くつて説明の出来るものでありません、けれども、既に慈光を仰がして貰うて人生の本統の姿を見せて貰う者としてはどうして黙視することが出来るましよう。本紙「慈光」が刊行されることも、一人でも多く慈光を仰ぎ給うて本統の幸福に生きたまえかしと祈らるる悲願であり、私も、この不束な身を持つてまことにおこがましいとは思ひつつも何とかしてその「廣い明るい世界」を御紹介申上げたく、本號に於ても暫らく語りしていただき度うございます。就いては、私は次の

ような實際問題について、「底の知れない人生の苦惱」が、そこに光射したまう「慈光」によつてしつぽりと解かされる姿を御紹介したいと思います。

私の知人に、長らく教員をされて後叔母のうちへ嫁がれ、今は三人の子のお母さんになつて居られる方がありますが、ふとした事から叔母(養母)との間に感情がもつれ出し、それが遂に家庭争議にまで發展して進むにも進まれず退くにも退かれず、何とかして平安な道に出たいものと努めれば努める程、はしからはしから複雑な感情が生れるばかりとなつてどうすることも出来ず、ただ泣き濡れていられる有様であります。かつては人様の子を教えた身の面つとして、も又、わが三人の子をすくすくと育てたい母のやるせない氣持としても、圓滿な家庭を作り得ぬこの奥さんの苦惱はいかばかりでありましよう。何んとかして、何んとかして圓滿になる道は無いものかと泣き泣き道を信仰に求めてみても、わが心のわびしさは少しも變らず、どのように聞いてもわが胸の苦悶は更に暗れやらず、全く途方に暮れていらるる有様は見るからに痛ましく、まことにお氣の毒にたえません。

一四、他人の事でない

ところが、この事はよく考えさせて貰わねばなりません。私共はとかく之を「他人の話」として眺め、「自分は圓滿にやつている」

と考へたがるものでありますが、その、「自分は圓滿だ」と考へる事が果して本統に圓滿であるかどうか？、そこを靜かに考へて見ねばなりません。水面に浮び出た氷山の、形がたとえ小さいからとて冷い氷塊である事には更に變りがないように、私共も、如何に外見を上品に装うても心の底が常に對立的に排他的に燃つて居るのでは、それは圓滿ではあり得ません、ところが、なすべきない事には私共の心はいつともくすぶつて居り、どんな親しい間に於てすら、たえず「へだて心」があつて仕様がなほありませんか。

自分のして居る事、考へる事、それは當然なまねばならぬ、考へねばならぬ事でありながら——たとへば「人に親切にする」という事は人として當然の事であるのに——「おれは親切にしている」という氣持をどうしても離れる事が出来ません、若しそれ少し目立つた事でもしようものならすくに「よい事をした」と考へ、「せん管の事でもしたよな」氣持ちになり、全く、いばりたい心、恩に着せたい心がへばりついでなきません。

それかと思つてそれとは反對に、他人に對してはいつとも「斯うあつてほしい」と云う要求を持つて向つて居り——たとへば、譽めて貰いたい、認めて貰いたいと云うよな——その要求に叶えよるこびもするが叶わねば不満をいだく、斯うして、その要求をはしから大きにしてはいつとも不満をいだく、若しそれ、その不満を「こらえ」でもしようものなら「おれなればこそ」という心になり、全く、要求する心、攻めたてる心しか持つて居りません。

斯うして又一方では、「斯うせねば悪いだろう、ああしなければすむまい」と、氣がね、へつらいの心が捨てられず、時には「ああした」と安緒し、時には「してない」と氣にかかり、表むきは親

た。私はただ、その御眞実なる慈光を仰げばよいのであります。

ところが、その廣大無辺なる慈悲を人はなかく見ようとせず、折角佛縁に近づいても、その、簡明にして絶對なる眞実を卒直に受取る人のなかく少いのはどういふ事でありましようか。思つて見れば、それはまことに痛ましい事であるけれども當然の事であつて、この、久遠劫來の氷塊のような冷い心に、「おれは冷いだ」といふ温い自覺が起るう管がなく、況んや、温い佛のみ心を仰ぐよな温い心のあるう管がなく、氷塊のままに、氷塊を氷塊とも知らずに、久遠に流れて行くより外に道のないのが私であります。然るに今、おぼろ氣ながらも氷塊を氷塊と氣づかせて貰い、「冷いであろう」と理解します佛様の温いみ心を仰ぎまつる、是は是、炒豆に花が咲くよな全く不思議な現象でなければなりません。

悲しい哉、世の所謂まじめな方々が、幸に我徳性の完成を觀念しながら、修養によつて——我が力によつて——それが完成出来るものと誤見し努めても努めても温くなつてくれない、心の実態に突き當りながら、猶もわが氷塊の実態を發見し得ず、いつまでも人智の盲見に迷惑されて修養に依存し、不可能を不可能と覺り得ず、そこにそれを憐み給うて温めて下さる明るい高い智慧光が輝くものを、それは更に仰ぎ給わぬといふ事は、それが人生のやむを得ぬ姿であるとは云いながら敷かわしい限りでありまして、今めでたくも慈光を仰がして貰うもの、全く、「たま／＼」行信を得ば遠く宿縁をよるこべ」のおすすめに従つて、佛様の五却恩惟の本願といふ事がこの私一人のためであつたと仰がずにはいられないではありませんか。

と、申すと、まだ佛縁の到りたまわぬ方々は、「すべてを宿縁に任せて、運の至るを待つのか？」という疑問を抱かるるであります。

しいと云うものの心の底ではへだてて居り、全く、おのれのツヤを飾る事はかりに心をとらわれて居るではありませんか。

氣がつかねばそれまでですが、今氣がついて見ると、私の心はその、へだてる心、攻める心、むさぼる心しか持ち合わざ、表面どのように無事に見えても、水面下にかくれた氷塊のように、まことに冷いではありませんか。

一五、めでたい端緒

では、その冷い氷塊をどうすればよいのか。先に述べた奥さんの場合その苦しい實際問題をいつたうどうしたらよいものか？。

無反省の人なら「わたしは善いけれど母が悪いから」といふ事に於て、圓滿にいかれない責任を母にぬりつけてすまされましよう。又、馬鹿横着な人なら「仕様の無い事」として打ち捨てて、その不和の責任を運命の罪として涼しい顔で居られるかも知れませんが、御同情が、ありありと光り輝いて居るのです。その、「さぞ困るであろう」と知りし召す御理解の中にこそ、私のこの、して見よるの無い罪は、苦惱は、しつぱりと融かされてしまふのであります。

ところが、「宿縁をよるこぶ」といふ事は救われて後——氣づかして貰うて後——自然に出てくる餘瀝であつて、まだ救われぬものが、宿縁だからというて時の到來を待つて居る管のものではありません。若しその如く考へたら、それこそ自己を放棄するものであり、「死せる」に等しいのであります。

一六、どこまでも水

さて、それではどうすればよいのか？。一生けんめいになつてただみ教を聞けばよいのです。み教とは何か？。佛様の眞実なる温いお心を聞くのです。わけを聞いて物識りになつて、それから救われる——のではなく、すでに、現に、温いみ心に包まれて居る事を聞くのです。ここを聞き違ひしてはなりません。

さあ、佛様のお心を聞きましよう。佛様は今、修養しても、修養しても、どうしても善くなれない私に、「どうしても善くなれないお前だ、どうしても圓滿になり得ないお前だ、さぞ苦しいであろう、そこが可哀相でたまらぬ」とおっしゃいます。ところがそれを聞く方では、「そのお慈悲が分つたら少しは温い心が起つて善くなれるだろう」と、またしても豫想を立てて、何とかして少しは温くなるうとあせるのです。

ところが佛様は、「お前はそんな豫想を立てるけれども、お前には温くなれる力は全然無いのだ。その力が無いばかりか、『さう云う自分だ』といふ事を知る力も無いのだ」とおっしゃいます。「そのよな無智なお前に、その様な悪いお前に、温い心、感謝する心のあるう管がなく、温い心のあり得ないお前に圓滿も調和もあるう管がない、悲しかりうけれど、それがお前の性分だから——さういふお前だからふびんでたまらない」とおっしゃいます。

ところが、聞く方では又、「それほど御親切と聞くからには少しはよろこばれそうなもの、温い心になれそうなもの」と、又しても温い心になろう、なろうとあせるのです。そこで佛様は、「よろこべる方の無いものが、よろこぼう、よろこぼうとしてあせるその姿こそ、自分で自分を知らない、深い迷いの、無智なお前の姿であつて、お前としては、それより外にはして見ようが無いのであろう、だからそれをやめよとは言わぬ、賢うなれとは言わぬ、迷いを止めよとは申さぬ、その、深い迷いの、して見ようのない苦惱のお前である事がふびんでたまらない」とおつしやいます。

さあ、ここは一つしみじみと考えて見ねばなりません、前の奥さんの場合、「たとえお母さんがどんなに悪いにしても、それに對抗してそれがやめられない自分は尙更悪いのであるから、お母さんのよし悪しに拘らずただ「私が悪い」となりさえすれば何事も心から笑えて、圓滿に調和がとれそうなのを——と、思えど、理くつの上では「自分が悪い」となつて呉れても、心の奴がどうしても「本統に悪い」となつて呉れず、「自分も悪いがお母さんも悪い」という心がどこまでもくつ付いて来てどうにもならず、そうして、そこを努めればつとめる程「自分は斯うまでつとめるのに向うはそれを知つて呉れぬ」となつて、どうしても「わたしが悪い」の本物になつて呉れませんか。

噫、考えて見れば、どこまで行つても「わたしが悪い」の本物になつて呉れない程の悪い奴でありながら、その悪い事は攻めず、どこまでも「自分も悪いが相手も悪い」と相手を攻めて、際限なく人も苦しめ自分も苦しんで行くより外に仕方のない性分の私でありました。げに、仕末のつかない、どこまで行つても「悪人を悪人と

の如きこの罪の塊り故に、見捨てられぬと引き取つて、私と共に泣いて下さる御眞實でました。

思えば、グチの深さよ愚さよ。慈悲の強さようれしさよ。「懐かしと思う心も我ならで、親のお慈悲の通り故なり」——この氷のような私に、ほのかながらも自性が知れ、この迷える奴が、この悪い奴が、悪いまんまに安らわしていただける世界を興え給うとは、不思議も不思議全く佛願力の不思議と驚くより外はない。かくて凡小の私が何を力むこともない、凡愚の私が何を悲しむ必要もない、仰ぎ見れば差ししみ光りにしつぽりと抱かれてある私であつたではありませんか。

かくして、佛様は私に本統の幸福を興えんために——私を佛の世界に誘引せんがために——まず私に、私が罪の塊である事を知らして下さるのでありますが、それは全く不可能を可能にして下さる事であり、右に心を起さしめ給う事であり、願力の偉大さに驚嘆せざるを得ないではありませんか。

さて、そうして今願力の不思議によつて、大悲の光明の塵海にしつぽりと落して貰つている自分と氣付かして貰つて見れば、今迄の矛盾ばかりの暗い世の中と思つた事がまことに明るい楽しい世の中と變り、悲しいと思つた人生がまことにうれしい人生と變り、圓らずも、運不運を超え、煩惱を超え、苦惱を超え、途なる大安慰に歸命させられて仕舞うではありませんか。慶ばしい事かな。

その衆禍の波轉する風光については更に次号に於て語らしていただきますと思ひます。

(合掌)

さとり得ない悪人」の私、その悪人の行く所、その悪人の住む所、どうして圓滿がありましよう調和がありましよう。之は單に、家庭問題ばかりではありません誰に對しても、何事につけても——佛様に對しても、道を聞くにつけても——いつの場合も同じであり、微笑の生活を理想としながら、その實は、いつも鬨涙にむせぶより外仕方のないのが私の現實でありました。

然るに、悲しい哉やそれをそれとよら覺らずに、圓滿を望み、微笑を欲して、それが出来ない罪を人にぬりつけて、人が邪魔して、社會が邪魔して圓滿が出来ぬように思い込み、困る困ると泣いているコノ私こそ(奥さんこそ)まことに恐ろしい、悪人ではありませんか。然も、それほど恐ろしい悪人、それほど横着な自分でありながら、それでもまだ「自分はすぐれている、分つている、お慈悲を聞かして貰つている」と思い込んで、勝者の氣持ちでいる私であるとは……いや、はや、氷は遂に、氷とも知らぬ氷であるより外に道がないのであります。

一七、かねて知ろしめされて

ところが佛様が、そこをかねて見抜いて下さつて、「煩惱具足の凡夫よと理解して、見捨てはせぬと同情して下さつて」どこどこでも知ろしめすと云う事は、是は、他人の事ではなくコノ私のためであり、「話」ではなくコノ私の現實の上にあると光りて下さる事實であつた、と、はじめて、とうとう戴かして貰うばかりではありませんか。

今、そのお慈悲に遇うて見れば、佛様はまさに私のものであり、私はただ、その佛智を浴びて、一切を佛智のお計らいにお任せ申せばよい。悪うてもよいのではない、よくならうにもよくなれない氷

雲の峰

疲れたる旅人の、あおぎ見る大空に

さまざまの姿して、わきあがる雲の峰

わきあがりやがてまた、崩れゆく雲の峰

あわれそのさだめなき、まどわしの姿かな

わが迎る運命の、はてしなき旅の空

われはまた日毎見る、たのみなき雲の峰

持名抄

まめやかに淨土をもとめ、往生をねがわんひとは、この念佛をもて、現世のいのりとは思ふべからず。ただひとすぢに出離生死のために念佛を行すれば、はからざるに今生の祈禱ともなるなり。これによりて靈驗教といえる經の中に、信心をもて菩提をもとむれば現世の悉地も成就すべきことをいうとして、ひとつのたとえをとけることあり。

たとえば人ありて、種をまきて稻をもとめん。またく稗を望まざれども、稲いできぬれば、稗自ら得るが如しといえり。稻を得るものは必ず稗を得るが如くに、後生を願えば必ず現世の望みかなうなり。稗を得るものは稻を得ざる如くに、現世の福報をいのるものは必ず後生の善果を得ずとなり、經釋のぶることかくの如し。

聖人の常の仰

花田正夫

聖人の常の仰には

「彌陀の五劫思惟の願をよく／＼案ずれば、

ひとへに親鸞一人が爲なりけり、

されば、そくばくの業をもちける身に、てありけるを助

けんと思召したちける本願のかたぢけなまよ

一、常の仰

歎異抄總結文

聖人御入滅後七百年の今日、聖人の常の仰に接することが出来るのは、ひとへに唯圓大徳の御恩である。總て常の仰というものは、語られる方では無意識的に、極く自然にせられるもので、言われたあとでもあまり意識せられない場合が多いから、常隨相近する者の其の底にのみ深く刻まれる言葉である。

次に常の仰は語られる人の生命に深く滲み徹つた、血となり肉となつた言葉であつて、よきにつけあしきにつけて自然に発露し、万人の前に繰り返されたものである。語られる人の生命がそれ一つに貫ぬかれて、生活の基盤がそこにかがわれるものである。だから聖人の常の仰を頂けば聖人の眞面目に直接お会い出来るのである。然し唯圓大徳も聖人御在世の時、聖人がまた同じことを仰られて

いるといつた風に軽く聞き流していたかも知れないが、聖人御滅後三十年の歎異抄を誌された時には、全くかけがえのない金言として強く深く心弦にひびき無限の感謝の情が溢れたことであろう。

二、親鸞一人がためなりけり

私共が先づこの聖人の仰を頂いて一番印象深く心に刻まれるものは、親鸞一人がためなりけりの一句である。私は長い間この御言葉はどういう味であるか、どう了解したらよいのだらうかと色々と憤慨した。十方衆生の救済を誓われた阿彌陀佛の本願を、親鸞一人がためなりけりと感佩される御心底が不審でならなかつた。

時には、「我身一人の秋」といつた風な詩人の句を想ひ浮べて見たり、時には、廣島の某小學生が教育勸語の「爾臣民」とある爾とは私のことである、と答えたときいて感激したこともあつた。又時には、法華經の長者窮兒の吐論において、長い間流浪落魄の窮兒を迎えた親なる長者が色々と方便をめぐらして育て上げた擧句、親戚知己を招いて大宴會を催し、其席上父子の名告りをあげ全財産を譲つた時「我願わず、求めざるにかかる財貨を我身一人に得たり」と窮兒が狂喜したとあるのを知り大いに解つた積りになつたこともあつた。或時は、信仰は何處までも自分一人が問題である。徹底した個人

的なものである。他人に眼を注ぐようでは駄目である、死に臨んで、は獨生獨死獨去獨來である。聖人はそこに立たれて、一人が爲なりけりと味われたのである、それでこそ力強いのだと感心させられたこともあつたが、それではこちらが強いて十方衆生とあるのを我身獨りに取らねばならぬ無理があつた。

こうして私に大きな指針を與えて下さつたのが池山先生の「親と子は二つにして一つなのだ」という一語であつた。「親が絵での子が可愛い」というのは結果であつて、親にとつては小供の一人一人がか、かけがえのないものだ」と教えられた。佛の衆生を總て憐憫されるのも衆生の一人一人をかけがえのないものとみそなわされる自然の結果であるといふに了解せられた。

然し小供のない私にはそれが直接に實感されない、それに相違ないといふまでは思うが、そうだとならないで、或日のことであつた。亡き父母のことを憶ひ續けていた時、フト氣づかされたのは、自分は五人兄弟であるから五分の一の親を思うべきなのに、他の四人の兄弟の存在は問題にならないで、飽迄も私一人のための親であるとの實感であつた。私は別にことさらにそう思うのでもないのに、親を思うと何時も自然にそうなるのである。

そこで大いにうなづいたことは、私一人の親として常に感得出来るのは、父母が常にかげがえのない者として私一人を長い／＼間育ち込んで下された結果である。點滴が岩をもうがつに似て、親の心がこちらに直接に自然に反映して私一人の親と感得するのだとしらされた。聖人が親鸞一人がためなりと常に御述懐遊されるのもここにあつた。彌陀佛が常に慈父母となり、二子の如く憐憫される佛心のそ

のままが聖人の御心に感應して、一人が爲なりけりと繰り返されたのであつた。涅槃經の「阿闍世の爲に涅槃に入らず」の阿闍世が、そのまま、親鸞と轉じているばかりである。夏は暑いから暑い冬が寒いから寒いというと同じく、阿彌陀佛の五劫思惟の本願が、親鸞一人がためであるから一人が爲であると仰られたばかりで文句も理窟もない、それがそのままそれである、冷暖自知より外はない。

さてそこまで知られる時、聖人の仰がそのまんま我身の上におちて来る。即ち私一人をかけがえのない者として久遠の昔から哀憫し護念し憶念して下さる阿彌陀佛の實存しますことを聖人が身をもつて證して下さるのである。常の仰を味つていると何時しか聖人の御姿は消えて私一人が久遠の慈光下にあることを知らしめられる。見物席にあつて傍觀していた私自身が知らぬ間に香光莊嚴の檜舞台にひき上げられている。何たる不可思議であるうか。然し聖人も亦「阿闍世の爲に涅槃に入らず。阿闍世とは一切五逆の人なり。有爲の衆生なり」の佛語を感佩されては、「阿闍世とは我なり、五逆の人、有爲の衆生とは愚痴の身なり」と直ちに味到されて、親鸞一人が爲なりけりと轉化同入せられている。して見れば聖人の御述懐がそのまま我事として引接せしめられるのも願力自然の善巧である

三、されば、そくばくの業を、もちける身に、てありけるを

光の直射するところに無数の塵埃が見え初めるように、親の眞實心が徹到するところに子の懺悔はある。彌陀佛の五劫思惟の清淨眞實なる心光を御身一人の上に感得せられる聖人は「さればそくばく

の業をもちける身にありけるをたすけんと申し召したちける本願のかたぢけなまよ」との懺悔と感謝が常に御口から繰り返された。そくばくの業とは數限りもない然も根強くまつわつてつきることのない悪業煩惱の謂である。その具体的内容が聖人晩年の愚弄悲歎述懐である。

淨土眞宗に歸すれども眞實の心はありがたし虚假不實のわが身に清淨の心もさらになし外儀のすがたはひとごと賢善精進現せしむ貪瞋邪偽おおきゆえ奸詐もはし身にみりて悪性さらによめ難しところは蛇蝎の如くなり修善も難難なるゆえに虚假の行とぞなづけたる無懺無愧のこの身にたまこと心はなけれども彌陀廻向の御名なれば功德は十方にみちたもう小慈小悲もなき身に有情利益は思ふまじ如來の願船いまさずば苦海をいかでか渡るべき蛇蝎奸詐のころにて自力修善はかなうまじ如來の廻向をたのまでは無懺無愧にてはてぞせん。徹頭徹尾御自身の悪業煩惱の塊であることを投げ出されての懺悔である、清淨ならざるなく眞實ならざるなき佛の慈光に照らし出された凡夫迷妄虚假の實相を微塵の苛責なく吐露遊されての御懺悔である。これがされば、そくばくの業として仰られる内容である。唯圓大徳もかかる常の仰を蒙つては直に思い浮ぶのが善導大師の「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して出離の縁あることなき身としれ」という金言であつた。東西相去ること千里、古今相距つること幾百年前聖賢の表白が肝膽相照應して全く規を一つにしているのは、いづれも佛智によつて自照せられた凡夫の眞實相であり、佛のかねてしるしめす凡夫の實体そのままの懺悔であり表白だからである。盡未來際を経ても不變不改の金言である。

二歳途に念佛門に歸せられ無明長夜の、燈炬を得られたのである。白井成允先生は母堂の死を縁とされて、「天なり命なり」の儒教に安らぎを失われ、基督教の門を叩かれて數年、そこにも安らぎを得られず近角先生の教を聞かれて開法途に四年、いかにしてもまじめになり得ぬことに行き詰られて、彌陀佛の本願は斯くの如くふまじめでしかあり得ぬ者の爲めであつたと氣付かれて初めて大安心を得られた。そしてふまじめでしかあり得ぬ自分を諭えて常に濁水満々たる大河の話をされている。即ち「人々が濁水の満ちた大河の橋上に立つて、濁水を淨めようと氣短かに考えるが、河の濁りのよつて来るのは遠く遙な山上から始つているので、橋上であせつてもどうにもならない。丁度そのように我々のふまじめも、よつて来る淵源ははるか久遠の生命の濁りに起因しているの、これから先もそうであるより外はない、それを何とかしよう、何とか考へると考へていたことが誠に身の程を知らぬことであつた」と一分一厘如何とも爲し得ぬ我等の實相を告白せられていられる。

全く三世に渡る生命の濁惡さ、「一切群生海無始より已來乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心無く、虚假詭偽にして眞實の心無し」と知らされる時「是を以て、如來一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於て善薩の行を行じ給ひし時、三業の所修、一念一刹那も清淨ならざるなく眞心ならざる無し」と「たすけんと申し召し立ちける本願」を頂戴するばかりである、凡夫直入の眞心はそこに決定せられる。

凡夫虚假の相に氣づかされつつなおよいのわりのとはからいが難るのは三世に渡る生命の濁惡さをかたて佛が見抜いていらせられることを知らないからである。

一扱て兩聖人は御自身のこととして以上の懺悔をせられては、我自身自身はどうであらうか。「汝自身を知れ」とは千古の名言であるが、どうしたら正しい自己を知ることが出来るのか。佛陀は、鏡は鏡自身を寫し得ず、刀は刀自身を切ることは出来ぬ、如何なる智者も身短三尺は暗闇である」と訓えられている。自己反省とか自己を廻り下げるとか言つて見ても、元來不完全な自己が極く皮相の自己の片鱗、然も誤謬だらけのものしか見出し得ないであらう。唯一つ正しい自己の全貌を知る道は完全圓滿な鏡の前に立つばかりである。狂者は狂を知らないが醫師はよくそれを見抜く、即ち佛智によつて見出された古聖賢の懺悔を鏡とする外にない。

聖人の悲歎述懐と大師の懺悔こそ私共の眞相を知らせて下さる唯一無二の明鏡である。私共の日常の心の動きと身の行をこの鏡に照して實驗しなければならぬ。孔夫子も「學びて思わざれば實し」と訓えられている。教を聞いてもそれを毎日の生活、實際問題の上に實習し實驗しないならば無効である。繪を描くには紙がある。我等日常の生活の紙の上によき教の靈が描かれて行くことが大切である。

得られたのである。

近角常觀先生は清澤滿之先生を中心として白河黨を作り宗團革新運動に邁進せられた末五分五分根性のやまぬ一分一厘も眞實の善の出来ない、常に惡に負けてばかりいく自分に行き詰られて大煩悶に陥られて廿九歳にして初めて佛の大慈悲を感得せられて最大良友を得られたのである。

池山栄吉先生は獨乙に留學後、日本最初の労働問題の提唱者となられ、全身心を投じて努力せられた擧句に、名利の心が中心となつて眞の善は微塵も出来ない偽善でしかない自己を自覺せられて四十

四、むすび

聖人がよきにつけあしきにつけても、またたづね来るあらゆる人々の前に終生繰り返して下された常の仰こそ、我等の身の罪惡の深き程を知らせて下さる絶對無二の鏡であると共に、朝夕罪業にのみまどい、さるべき業縁の催しによつては如何なる振舞をするかも知れぬ身の全体を久遠の昔よりかねて知悉し給うて、その故にこそかけがえない者と、私一人を哀憫下さる彌陀佛の實存しますことを御證し下さるのである。

奥山に柴折り柴折るは誰がためぞ、親の身すて、かえる子のためとは鹿捨山の歌であるが、私共何時もうつかりぼんやりして、聖人こそまことに徹底した古今獨歩の人であるなどと感心ばかりしていて他人事に常の仰をも聞き流してのみ居る。親の身すて、かえり見ない者に老母となり柴折となつて聖人は常の仰を歿して下されたのであつた。

法然聖人の御歌

露の身はこゝかしこにて消えぬとも

心はおなじはなのうてなぞ

柴の戸にあけくれかゝる白雲を

いつむらさきの色にみなさむ

往生はよにやすけれどみな人の

まことのこゝろをなくてこそせぬ

あさがき

講和問題、台湾問題、自衛權問題、等々新春早々多事多難の山積であります。私が方も私共の手のとどかぬ問題ばかりで、我が方をまもりつつ事態を静観する外はありません。然し風が東から吹いても西から吹いても太陽は常に東から昇ります。萬古不動の佛陀の陽光を浴びてあるべきように世を處して参りましょう。

△佛陀論は山下先生が佛の實在を苦にされる方々へのよき指標を掲げて下さいました。「如來に歸依するは、如來に調伏せられて如來に歸依するなり、法の潤澤を得て信樂の心を生ず」とは聖徳太子の指南であります。如來の調伏なくしては歸依も亦不可能であります。

最近所謂哲學者の手で知的宗教論が巷間に澤山出ました。然も情意の世界に込み込んだものは稀であります。佛法は毛孔から入ると昔から申します。知情意の全人格に佛心が徹到して初めて人間革命が建現するのであります。或無神論者を評して「頭は無神論であるが身体は有神論者だ」として肩を併せて居る名句がありますが最近の哲學者は「頭は有神論で身体は無神論者である」と評せられてもやむを得ないでせう。

太陽を探すのに提灯や洋燈は不要です。提灯の知識や、洋燈の経験で探し出した太陽は光も熱もない陰の太陽、作られた太陽です。太陽

陽は太陽自らの力で明らかに現われます。△歎異抄讃仰の波岡先生の一文はまことに身心を擧げて歎異抄の中に没入された貴重な手記であります。今はなき先生の徳風を偲び、有り難く頂戴いたしました。

△松村氏の原稿は愈々底をついての慈光を簡明に然も詳細に知らせて下さいました。私も對人問題において自分の鬼の心、蛇の心に南無三、行きつまつて文字通りウロウロでありました。嗚呼然しそこにこそ彌陀佛本願の御誓がましますのであります。私の全体を知悉し洞察されての大悲心ましますと知らされては身も心も融けるばかりであります。大悲一つが私の生命とさせられました。

△聖人の常の仰は歎異抄を拜誦し始めまして以來常に私の眼を曇らし居りましたこと誌させて頂きました。

※ ※

- こころ路、福島政雄先生著、定價百圓送料廿圓。発行所、神奈川県田浦局區内横須賀市船越、谷戸六六二、福島博士遺歴記念刊行會
- 山下成一先生法話會
 - 毎月二日午前午後、十七日午後、愛知縣知事那智町市場、山下先生宅
 - おのゝこゝろ法話會
 - 毎月六日午前午後、廿八日午前午後、名古屋市中村区岩塚町材高寺
 - 花田正夫法話會
 - 毎月第一日曜午後、名古屋市中区門前町西

別院、毎月廿四日、市内昭和区北山町漱西寺
 ○法通寺、昭真會講座
 毎月第三日曜午後、夜間、講師は山下先生
 本多先生、花田等交替して居ります。愛知縣知多郡鬼崎村榎戸、常滑線榎戸下車。

昭和二十五年 二月十日 印刷 昭和二十五年 二月十五日 發行 毎月一回十五日發行	定價 一部金拾五圓 (郵稅共) 一年分金百八拾圓 (郵稅共)	名古屋市昭和區幸樂町二ノ二九 編集兼 發行所 花田 あ や	名古屋市千種區千種町馬走二八 印刷所 本 伍 郎	名古屋市千種區千種町馬走二八 印刷所 千草 印刷所	名古屋市昭和區内幸樂町二ノ二九 花田正夫方	發行所 慈 光 社 名古屋一〇四七〇番
--	-----------------------------------	----------------------------------	-----------------------------	------------------------------	--------------------------	------------------------